

3学年だより

NO 575

飛翔

令和3年1月21日



小田原市立城山中学校
学年主任 水野喜代治

私の受験

私は、47年前に、西湘高校を受検した。内申点が低かった私は、担任の先生から、何度も呼び出されて、「水野、高校を変えたほうが良いぞ!」とアドバイスのような脅しのような指導を連日にわたり受けた。母に相談すると「喜代治の受けたい学校を受けなさい。悔いのないようにね。」と決まり文句のようにいつも私に答えてくれた。私は、自分の持っている力をすべて発揮して、それでも合格できなかつたら、悔いはないと思った。それよりも、チャレンジしないで進路を変更することのほうが自分にとっては受け止められなかつた。だから、私には覚悟ができていた。「どのような状況になっても、それを受け止めて、前に進むという覚悟が!」。合格できなかつたら、母が許可してくれた併願校に進んで頑張るという決心をしていた。母子家庭の我が家にとって、私立高校に進学することは経済的に非常に厳しかった。それでも、母は、「喜代治が納得する受験をなさい。」と言ってくれた。だから、私の心の中では、絶対に西湘高校に合格しなければいけないという思いが渦巻いていた。

私は、不合格だったらどうしようということよりも、私立高校に行くことで、経済的に母に負担をかけたくない。という悩みが一番重かった。担任の先生のアドバイスを受けて、志望校を西湘高校から他の学校に変更すれば、母への負担を解消できたが、どうしても、西湘高校に進学したかった。母が最後まで、「あなたの行きたい高校を受験しなさい。高校に行くのはあなたなのだから、あなたの行きたい学校が一番いいよ。かあさんは、応援するだけですよ。」と言ってくれた。

私は、担任の先生のアドバイスに従わずに、西湘高校に願書を出した。「水野、200%落ちるよ。」という担任の先生の最後通告を跳ねのけて、受検した。このような、状況での受検だったので、必死に勉強した。毎日、寝る時間も削って勉強した。自分は、これ以上、勉強することはできないと言えるまで、机に向かった。これだけ、頑張ったので、落ちても悔いはないと自分は思えた。

受検が終わって、合格発表があった。見事に合格することができた。奇跡だったと思う。私は、合格してうれしかったが、それより、チャレンジした自分が良かったと思っている。15才の受検で不合格になっても、私は満足していたと思う。そして、不合格でも、その後の人生は、今と大きく変わっていなかったと思う。しかし、もし、チャレンジしなかつたら、私の人生は今と同じような人生ではなかったと思う。高校受験以降、私は、常に自分の気持ちに正直に、チャレンジするときは、チャレンジして、それが、届かないときは、それを受け止めて、前向きに進んでいく、この生き方は、15歳の受検の時の西湘高校の受検から始まっているのだと思う。私のチャレンジを笑顔で認めてくれた母に感謝している。母は、合格、不合格よりも納得して生きていくことの大切さを私に伝えたかったのだと思う。

真剣に、進路に立ち向かっているあなたたちを見て、母のことを思い出しました。